

安養寺跡 (解説シート1)

一 発掘調査からわかった安養寺一

上野地区の安養寺は、かつてこの地域で屈指の規模を誇った大寺院で、現在の済生会明和病院の敷地内にありました。伝承では、「安養寺の境内地は百間四方あり、その周りに堀をめぐらした大伽藍」であったとされています。安養寺がなくなり病院となったいまでも字名に「寺屋敷」が使われており、その名残をしのぶことができます。

安養寺は、京都五山の一つ臨濟宗東福寺に属する寺で、伊勢国出身で東福寺第九世だった癡兀大恵が鎌倉時代の永仁5年(1297)に開山しました。室町時代には幕府や伊勢国司の北畠氏から手厚い保護を受けていましたが、天正4年(1576)、戦火で焼失したと伝えられています。その後、天正16年(1588)、伊勢街道が付け替えられた頃、現在の場所に移されました。

寺に保管されている数多くの貴重な古文書は、県指定文化財となっています。史料の内、貞治5年(1366)の『足利義詮御教書写』では「安養寺を諸山に列する」とあり、室町幕府の保護がうかがえます。諸山とは、室町幕府が定めた「五山十刹」の次位にあたる寺格で、安養寺の地位の高さを示しています。その他にも、密教において師が弟子に秘法を伝授したことを示す「印信」と呼ばれる証明書も多く残されています。このことから安養寺が教学の場として栄えたと考えられます。

伝承や古文書で名刹として知られていた安養寺ですが、実際の規模や建物などはよくわかっていませんでした。しかし、済生会明和病院の新築などの工事に伴い、明和町がこれまでに実施した6回の発掘調査の結果、古文書や地元の伝承でしかわかっていなかった寺の全容が少しずつわかってきました。



伊勢街道沿いに建つ現在の安養寺



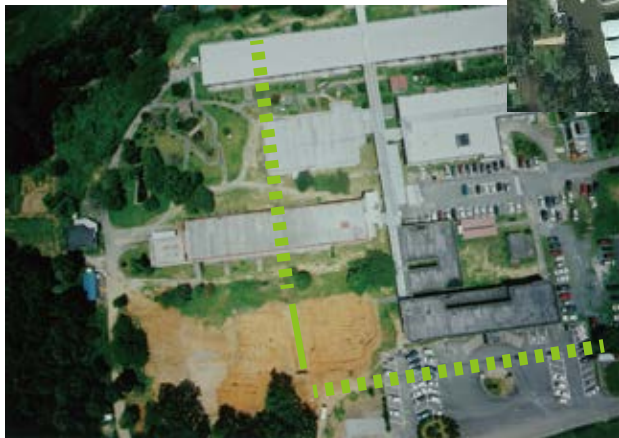
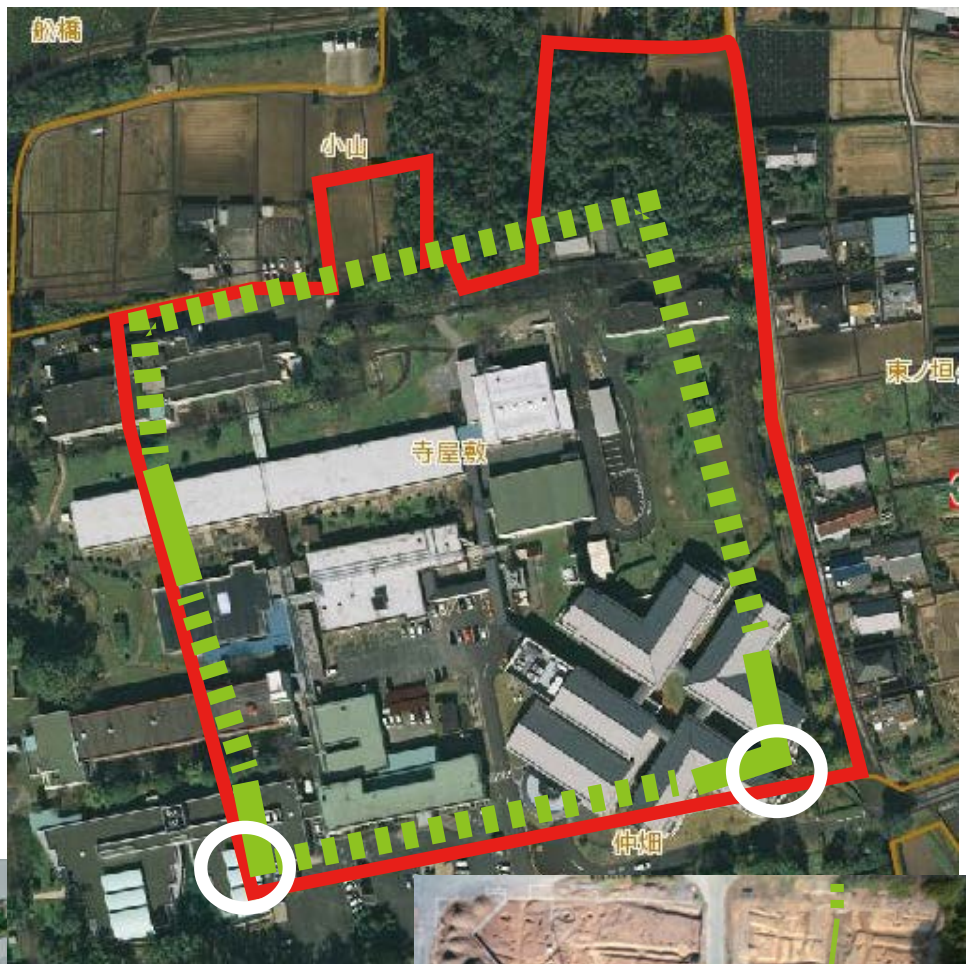
- 第1次調査: 1999年度
- 第2次調査: 2003年度
- 第3次調査: 2004年度
- 第4次調査: 2012年度
- 第5次調査: 2012年度
- 第6次調査: 2013年度

明和町が実施した発掘調査箇所

寺院の存在を想定させる「寺屋敷」の地名範囲（赤線）と、大溝の範囲（緑線 ※実線は発掘調査で明らかになった箇所、破線は推定）

大溝の一部は、数百年が経過した今でも一段低くなった溝の痕跡として確認でき、溝の大規模さがよくわかります。

大溝の外側からも建物跡が確認され、周辺にも安養寺に関する施設が広がっていた可能性もあります。



一寺を囲う大溝一

調査では寺域を囲う大きな溝（以下大溝）などが見つりました。大溝は、幅約4～5m、深さ約2mの大規模なものです。大溝はいくつかの調査で見つかっており、安養寺全体の規模は東西およそ170m、南北およそ180mの非常に広大な敷地を有していたと推定されます。まさに、伝承を裏付ける結果となりました。このような大規模な溝は、単に寺を囲うだけでなく防御制を持った一種の「堀」のような役割で、さながら城砦のようであったとも思われます。中世には各地で争いが多く発生し、寺院でも僧兵が武装することもありました。

さらなる解明へ

これまでの調査により大溝で囲われた寺域の中心部と思われる箇所を調査しましたが、病院の建築などにより既に遺跡の大部分がなくなっています。そのため、本堂などの主要な建物の発見には至っていません。ただし、土地を区画することを目的としたと思われる溝や溝を渡る橋、回廊の跡なども見つかっています。また、造営から廃絶までの数百年間に、何度も手を加え少しずつ寺の様子も変遷しているようです。

今後、出土品の分析を通じて、詳しい安養寺の歴史が明らかになることが期待されます。